

2024年12月1日 アドベント主日礼拝 待降節 第1主日 聖餐礼拝

説教題：「**しなければならないことをする人生**」

聖書箇所：ルカによる福音書17章1 - 10節（142頁）

説教者：秀島牧師 招詞：讚美歌93 - 1 - 11 交読詩編：詩編130編1 - 8節（145頁）

讚美歌：83/231（久しく待ちにし）/242（主を待ち望むアドヴェント）/81（主の食卓を囲み）/27

「今週の聖句」〔…自分に命じられたことをみな果たしたら、「わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです」と言いなさい。〕（ルカ伝17：10）

「牧師室の窓」 「一年の始まりとなるアドベント主の降誕を待てる喜び」

「一年の過ぎゆく早き驚きつ日々の恵みの主ともにありて」

(1)皆様、おはようございます。本日から待降節（主の誕生を待つ待降節、アドベント）に入ります。アドベントの期間の主日（つまり、日曜日）は4回あります。その4回的主日を経過して、12月25日にイエス・キリストのお誕生を迎えます。12月25日は去年もあり、今年もあり、来年もあり、毎年あります。更に言えば、私たちの生死に係わらず、主の誕生日が来るのです。と言うことは、別の言い方をしますと、私たちクリスチャンは永遠に生きると言う希望が与えられているのです。限りある人生が主と共に永遠の命へと導かれるのです。

待降節の期間での主日（日曜日）は4回あると申しあげました。この4回的主日を4本のローソクに見立てて火を燈します。4回の待降節の主日を目で見て、体で感じるのです。体で感じることは大切です。聖書を読む場合もそうです。声で読み、目で見ると、耳で聞き、指で感じ、皮膚で受け入れるのです。そして、「空間認識」により、聖書を立体的に理解することが大切です。「空間認識」とは、自分が今どこにいて、数メートル先を見て、どの様な状況の中に、文脈の中に自分がいるのかを知ることです。

(2)本日の聖書箇所は17章1節～10節までの僅か10節ですが、内容は4項目もある上に、夫々に深みがあります。しっかりと読み取って参りたいと思います。今日の聖書箇所に書かれている内容の幾つかは、マタイ福音書・マルコ福音書の中に夫々個別に書かれている内容を、ルカ福音書のこの箇所に纏めています。纏めて書いていることは、今日の聖書箇所の第1節に「弟子たち」と書かれている一方で、5節では「使徒たち」と表現されています。「使徒たち」という言葉は、キリストの死後に形成された初代教会の指導者たちを指し示す言葉です。イエス様ご存命時の出来事を弟子たちが思い出してここに纏めて書かれたものと推測できます。

この場面の立て付けとしては、直前の16章に書かれている「金持ちとラザロ」の譬え話で、イエス様は「モーセと預言者」（つまり、「律法と預言者」、分かり易く言いますと、旧約聖書）の言葉に「耳を傾け」なさい、旧約聖書が語っている深い意味を理解しなさい、うわべの形式的な理解に陥ってはならないとお話しになられたのでした。つまり、信仰をどの様に受け止めるかについての解説をイエス様は弟子たちにされていると理解することができるでしょう。解説が4種類、4パターン記載されているのです。

(3)先ずは、第1パターンです。今日の17章1節～3節の前半を読みましょう。〔(17:1)イエスは弟子たちに言われた。「つまずきは避けられない。だが、それをもたらす者は不幸である。/ (17:2)そのような者は、これらの小さい者の一人をつまずかせるよりも、首にひき白を懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がましである。/ (17:3)あなたがたも気をつけなさい。] ここには「つまずき」と書かれています。ギリシャ語の原文ではスカンダロンと言いまして、その意味は「罾、罾に使う餌、罪や不信仰や墮落への誘惑」という意味です。英語のscandal(醜聞、不祥事件、中傷、陰口)の元になった言葉です。口語訳聖書では「罪の誘惑」と翻訳されています。私た

ちの身の回りにも、人生の日々にも「つまずき」や「罪の誘惑」は沢山潜んでいます。注意信号や道路標識の様に注意を促す親切な標識がありません。寧ろ、私たちが吸い込まれてしまいます。旧約聖書の第1巻である創世記には、アダムとエバは主なる神から食べることを禁じられていた「善悪の知識の木の実」を甘い言葉に唆(そその)されて食べてしまいました。どの様に唆されたのでしょうか。〔(創世記3:4)…「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなる…」〕甘い言葉は人間の判断力を狂わせます。現代社会には「罪の誘惑」が沢山あります。…私が持っている資格に、消費生活アドバイザー資格があります。私たちの日常生活である消費活動を法律・経済・消費者行動などの観点からアドバイスする役割です。5年ごとに更新をするために、先日はその講習を受け、最新の情報や法律を学びました。現代社会は私たちの生活を豊かにすると共に、誘惑や犯罪が潜んでいます。その為には物事の本質を見抜く判断力と実践力を身に付けることが不可欠です。…現代社会では、物事を判断する基準を身に付ける、その為の教育が殆んどないと言っても過言ではありません。そういう意味では聖書を学ぶことは重要です。そのことのためにも日本基督教団も東京教区も北支区も、聖書の御言葉を宣べ伝える役目を担っています。

2節には「小さい者の一人をつまづかせ」てはならないことをイエス様は命じられています。ここで重要なことは「小さい者の一人」とは誰であるのかを知ることです。と言うことは、クリスチャンはこの世の中に「小さい者」がいることをしっかりと理解しなければなりません。もう少し踏み込んで言いますと、私たち自身が「小さい者」であることを自覚することが今日の聖書箇所テーマ・主題であります。少し飛びますが、今日の聖書箇所の10節には「わたしどもは取るに足りない僕(しもべ)です」と書かれています。関連性があるのです。

(4) この10節の話は後で申し上げますので、先に第2パターンを見てみましょう。3節の後半～4節です。〔(17:3)…もし兄弟が罪を犯したら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい。/(17:4)一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言ってあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。〕人間は間違える存在です。「一日に七回あなたに対して罪を犯しても」とはどの様な数え方なのでしょうか。一日24時間に7回罪を犯すとは、単純に割り算すると3時間4時間ごとに罪の被害を受けてしまうことになります。見方を転ずれば、私たち自身も多くの罪を犯していると言えるでしょう。大きな姿見の鏡で見ても、自分の真の姿や行動を自分で見ることはできません。マタイ伝18章22節には「七回どころか七の七十倍まで赦しなさい」そして、その35節には「心から兄弟を赦す」ことを天の神は願っていると、ペトロに対してイエス様はお話しされました。このことから、私たちは「悔い改め」ることによって、赦される存在であることが分かるのです。

(5) 続いて第3のパターンは5節6節に書かれています。〔(17:5)使徒たちが、『わたしどもの信仰を増してください』と言ったとき、/(17:6)主は言われた。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。〕ここでは弟子たちの「信仰」が増えることを願い出ますが、イエス様のお答えは全く異なっています。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば」、つまりごく僅かでも信仰があれば、何事かをなすことができるかと教えておられるのです。「からし種一粒ほどの信仰があれば」の「信仰」を「希望」に置き換えるならば、新約聖書ローマの信徒への手紙第5章5節に書かれている「希望はわたしたちを欺くことはありません。…神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。」に繋がってきます。「からし種一粒」が大切なのです。「一粒」の大切さです。私は学生時代に統計学を学びました。必修科目でしたので、この科目に合格しませんと、卒業が出来ません。懸命に学び単位を取得することができました。卒業できないかも知れないと言う恐怖が、卒業し

て半世紀を経過しても、夢の中で私を支配しているのです。逆に言いますと、「からし種一粒ほどの信仰があれば」と言う言葉はしみじみとよく理解できるのです。

(6)そして、第4のパターンが「取るに足りない僕(しもべ)」の話です。これは新共同訳聖書の翻訳ですが、聖書協会共同訳では「役に立たない僕」と訳されており、口語訳聖書では「ふつつかな僕」、文語訳聖書では「無益なる僕」と翻訳されています。ギリシア語ではアクレイオスと言いまして「無益な、役に立たない、哀れな、つまらない」と言う意味です。では一体その意味することは何なのでありましょうか。それは神に対する自分の立ち位置、立場を理解することに他なりません。先程申し上げました「私は今どういう状況にあるのかという『空間認識』」が大切です。サムエル記上3章に幼いサムエルが「主よ、お話し下さい。僕は聞いております。」と主に応えました。一方、先週の礼拝での聖書箇所ルカ伝16章に書かれている「金持ちとラザロ」の譬え話の金持ちは、「モーセと預言者に耳を傾ける」ことがなかったのです。つまり、「取るに足りない僕(しもべ)」とは、神を信頼する者であり、そのことによって主なる神に信頼されるものになることを示しています。ここにも聖書に特有な逆転の発想が、どんでん返しの事柄が記されています。「僕(しもべ)」とは奴隷制度があった当時の社会構造の中で、主に戦争で負けた国の国民が奴隷として主人の所有物となり、その命令によって行動していました。農作業などの労働をしても報酬(賃金)を得ることありませんでした。

では、10節に書かれている「しなければならぬことをしただけです」とは何を言っているのでしょうか。人類の歴史の中でも、現代社会の中での、人間の人生は極々、簡単に言えば、「生まれて、生きて、死ぬ」ことにあります。様々な人生があり、様々な生涯によって歴史が作られ、人間の社会が作られていきます。そうしますと、ここで単純な疑問が湧いてきませんか。「取るに足りない僕(しもべ)」が何故、なぜ「しなければならぬことをしただけです」と言うことができるのでしょうか。「しなければならぬこと」とは、神から与えられた「私の人生を生きるその生き方」であり、「あなたの人生を生きるその生き方」です。その生き方が人生最大の喜びと言えることにあります。

「その人生」と「生き方」を繋ぐものが「信仰」であります。「からし種一粒ほどの信仰があれば」とはこのことを指し示していると理解することができるでしょう。信仰とは神との会話であり、神からの贈り物、即ち、救い主の誕生であります。主のお誕生、降誕を待ち望みましょう。

・・・お祈りします。

主なるキリストの神様。私たちは待降節・アドベントを迎えることができました。日々の慌ただしい生活にあっても、聖書の御言葉によって養われていることに感謝いたします。御言葉に耳を傾け、悔い改め、神のもとに立ち帰り、日々を過ごして参りたいと願っています。

戦争が起きている地に住む人々に、自然災害で困難の中にある人々に、生活の中で困っている人々に、平安と慰めがありますように。教会に連なる一人ひとりに、地域で生活している、働いている一人ひとりに、み恵みがありますように。

イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

〔新共同訳ルカによる福音書(17:1)イエスは弟子たちに言われた。「つまずきは避けられない。だが、それをもたらす者は不幸である。/(17:2)そのような者は、これらの小さい者の一人をつまずかせるよりも、首にひき白を懸けられて、海に投げ込まれてしまう方がましである。/(17:3)あなたがたも気をつけなさい。もし兄弟が罪を犯したら、戒めなさい。そして、悔い改めれば、赦してやりなさい。/(17:4)一日に七回あなたに対して罪を犯しても、七回、『悔い改めます』と言っ

てあなたのところに来るなら、赦してやりなさい。」/(17:5)使徒たちが、「わたしどもの信仰を増してください」と言ったとき、/(17:6)主は言われた。「もしあなたがたにからし種一粒ほどの信仰があれば、この桑の木に、『抜け出して海に根を下ろせ』と言っても、言うことを聞くであろう。/(17:7)あなたがたのうちだれかに、畑を耕すか羊を飼うかする僕がいる場合、その僕が畑から帰って来たとき、『すぐ来て食事の席に着きなさい』と言う者がいるだろうか。/(17:8)むしろ、『夕食の用意をしてくれ。腰に帯を締め、わたしが食事を済ますまで給仕してくれ。お前はその後で食事をしなさい』と言うのではなかろうか。/(17:9)命じられたことを果たしたからといって、主人は僕に感謝するだろうか。/(17:10)あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならぬことをしただけです』と言いなさい。」]